

ジャパンカップ出走予定外国馬プロフィール

◆ サンダリングブルー (THUNDERING BLUE) = イギリス

せん 5 歳・芦毛 (アメリカ産 2013 年 4 月 26 日生まれ)

父:Exchange Rate = 母:Relampago Azul (母の父:Forestry)

馬主 : クライヴ・ウォッシュボーン

調教師 : ダヴィッド・ムニューイジエ

騎手 : フランシス・ベリー

通算成績: 21 戦 6 勝、2 着 4 回、3 着 4 回

総獲得賞金: 約 6,990 万円

主な戦績:	'18 ヨークステークス(英 G2)	1 着
	'18 スtockホルムカップインターナショナル(瑞 G3)	1 着
	'18 カナディアンインターナショナル(加 G1)	2 着
	'18 英インターナショナルステークス(英 G1)	3 着

ジャパンカップに出走を予定するサンダリングブルーはアメリカ・ケンタッキー産で、1 歳時にキーンランド・セプテンバー・セールで、ジム・マッカータン氏に 17 万 5,000ドル(当時約 1,830 万円)で落札された後、2 歳時にイギリスのタタソールズ・クレイヴン・ブリーズアップ・セールに上場されてハローゲート・ブラッドストックに 19 万ギニー(19 万 9,500 ポンド;当時約 3,720 万円)で落札されました。馬主は海運保険業を本業とするクライヴ・ウォッシュボーン氏。勝負服は白地にブルーラインがクロスされて袖も同系のストライプで、海がイメージされています。

血統は父がトムフルハンドキャップなど主に短距離戦で 6 勝したイクスチェンジレート(その父はダンジグ)で、母はストームキャット系の快速馬フォレストリーを父に持ち未出走のまま繁殖入りしたりランパゴアズール。両親ともに芦毛馬で、サンダリングブルーもこの毛色を受け継いでいます。父のイクスチェンジレートは 2012 年のモルニ賞(仏 G1)やミドルパークステークス(英 G1)などを制したレックレスアバンダンを出して脚光を浴びましたが、2016 年 1 月に 19 歳で亡くなりました。日本にも産駒は輸入されていて、主にダートの短距離で活躍する馬を出しています。サンダリングブルーの半姉のシャンパンギャル(父イエスイツツウルー)はカナダで 2 勝してワシントンオークス 3 着。

サンダリングブルーは 2 歳時は出走せず、3 歳の 4 月にジム・クローリー騎手を鞍上にニューマーケットの芝 1,600m 戦でデビューして、勝馬から 4 馬身 3/4 差の 5 着でキャリアをスタートしました。この年は先行して 2 着となったレースが 2 回ありましたが、5 戦未勝利で終わります。去勢手術を施されて迎えた 4 歳時は、最初の 4 戦中 3 戦で 3 着となかなか結果を出せずにいましたが、キャリア 10 戦目、エプソムのクラス 4 ハンデ戦(7 月 20 日;芝 2,020m)に 61.5kg を背負ったキーラン・シューマーク騎手とのコンビで 4 馬身半差の初勝利を挙げました。続くクラス 2 ハンデ戦(ニューマーケット、芝 2,000m)もシューマーク騎手で 1 馬身抜け出して連勝しました。次いでクローリー騎手に鞍上が戻り、サンダウンのクラス 2 ハンデ戦(芝 1,990m)も最後方から脚を伸ばして 1 馬身半差で勝利を収めて 3

連勝。シーズン最後となったニューマーケットのクラス2ハンデ戦(芝1,800m)は7着でしたが、単勝7倍の1番人気に支持され、「クラス2」では上位の評価を受けるまでになりました。4歳時の戦績は8戦3勝、3着3回です。

迎えた今年4月のクラス2ハンデ戦(エプソム、芝2,020m)から始動。ここは10頭立ての5着でしたが、競馬場をヨークに移した5月のクラス2ハンデ戦(芝2,050m)では後方から徐々にポジションを上げて1馬身1/4差抜け出し、人気に応えました。鞍上はアンドレア・アッゼニ騎手。6月のクラス2ハンデ戦(アスコット、芝2,390m)はランフランコ・デットーリ騎手との初コンビとなりましたが、初距離の影響もあったのか17頭立ての11着に終わりました。

そして7月14日のクラス2ハンデ戦(ヨーク、芝2,050m)からフランシス・ベリー騎手が跨ります。この馬にとって最後のクラス2戦となった一戦は逃げ切った勝馬から2馬身1/4差の2着でしたが、後方から良く差を詰めました。これを機にムニユイジエ調教師と、オーナーのウォッシュボーン氏はベリー騎手に鞍上を固定してサンダリングブルーに重賞戦線を歩ませることになります。中1週で臨んだヨークステークス(ヨーク、英G2、芝2,050m)は前走と同じ舞台。7頭立ての後方に控えたサンダリングブルーは長い直線を舞台に末脚を繰り出して最後はクビ差で優勝。デビュー18戦目にして重賞ウイナーになりました。

陣営が次に選んだのは、すっかり得意のコースとなったヨークの芝2,050mを舞台とする8月の英インターナショナルステークス(英G1)でした。7万5,000ポンド(約1,140万円)もの追加登録料を支払って出走したこのレースは、例年スターホースが集結しますが、今年は特に豪華な顔ぶれになりました。ライバルになったのは、上半期の王者決定戦の“キングジョージ”を制してここに臨んだポエッツワード、エクリプスステークスのロアリングライオン、英2000ギニーのサクソンウォリアー、ドバイターフのベンバトル、愛ダービーのラトロブ、そしてドバイワールドカップのサンダースノーといったG1馬たち。重賞を勝ったばかりのサンダリングブルーにとっては荷が重く、単勝51倍という離れたしんがり人気でした。しかし、ここでも自分のスタイルを貫いて後方から追い込み、ロアリングライオンから3馬身3/4差、2着のポエッツワードからは僅か半馬身差の3着でゴールに飛び込みました。

これでトップクラスの競馬にメドを立てた陣営はジャパンカップを大目標に定め、秋の競走スケジュールを組み立てます。ヨーロッパの場合、去勢されていると出られない重賞も少なくなく、小手調べに選ばれたのはスウェーデンのブローパークで行われた9月23日のストックホルムカップインターナショナル(瑞G3、芝2,400m)でした。いつも通り後方から2馬身差し切って格の違いを見せつけました。ムニユイジエ調教師はこの時の遠征で、輸送をこなしたこと、北アメリカと似た馬場をこなしたことを収穫として語っています。

陣営はジャパンカップに向けて、東京競馬場と同じ左回りで直線の長いカナダのウッドバインで10月13日に行われたカナディアンインターナショナル(加G1、芝2,400m)を選んで更なる遠征を取行しました。11頭立ての同レースで1番人気に推されましたが、同じくイギリスから遠征した同脚質のデザートエンカウンターの2着に惜敗します。スタートで他馬と接触したことに加え、直線でも前が塞がる不利があって1馬身差。3着馬が4馬身以上離れたことから能力はG1級と認められます。

3歳春のデビューからここまで21戦6勝で、今年は8戦3勝、2着2回、3着1回。去勢馬らしくタフで使い減りしないところはこの馬の長所です。左回りでは15戦4勝、2着4回、3着4回で、3着以内率は8割。延べ10人の騎手がコンビを組みましたが、ここ5戦はフランシス・ベリー騎手で固定

されて 2、1、3、1、2 着。サンダリングブルーの持続力ある最後の脚が、直線の長い東京競馬場でも発揮されるか注目です。



Photo by The Racing Post, Martin Lynch
2018 年ヨークステークス(英 G2)

ジャパンカップ出走予定外国馬関係者プロフィール

■ サンダリングブルー (THUNDERING BLUE)

● 馬主：クライヴ・ウォッシュボーン (Clive Washbourn)

クライヴ・ウォッシュボーン氏は、世界各国に拠点を持つ特殊保険会社ビーズリー・グループにおいて海上保険部門のトップを務めている。

1990 年後半からイギリスで競走馬を所有。ダヴィッド・ムニュージエ調教師とは彼がジョン・ダンロップ厩舎でアシスタントを務めていた時からの付き合いで、現在は所有馬の半数を預託している。主な所有馬に本馬のほか、昨年フランスのリステッド競走を制したハヴルドペがいる。

● 調教師：ダヴィッド・ムニュージエ (David Menuisier)

1980 年 9 月 12 日生まれ。フランス北東部のロレーヌ出身で、競走馬生産牧場を営む家族のもとで育ち、幼少期から調教師になることを目指す。大学卒業後はクリスティアーヌ・ヘッドマーレック厩舎で 2 年半、その後アメリカのリチャード・マンデラ厩舎で 1 年半の間アシスタントトレーナーを務め、前者では仏 2000 ギニー優勝馬アメリカンポスト、後者ではブリーダーズカップクラシックやドバイワールドカップを制したプレザントリーパーフェクトなどに携わる。その後自身がキャリア構築を望んだイギリスに渡り、ジョン・ダンロップ厩舎でのアシスタントを経て、2014 年にウエストサセックス州パルバラで開業。

2017 年までの 4 年間でイギリスの平地で 29 勝を挙げ、今シーズンは、11 月 14 日現在、123 戦 12 勝、38 万 231 ポンド(約 5,790 万円)で、獲得賞金順で 65 位。7 月に本馬で制したヨークステークスが初の重賞タイトルとなった。

今回のジャパンカップが、管理馬の日本初出走となる。

● 騎手：フランシス・ベリー (Francis Berry)

1981 年 1 月 2 日生まれ。アイルランド・キルデア出身。父フランクは同国の障害騎手として活躍後、調教師を経て、現在は J. P. マクメイナス氏のレーシングマネージャーを務める。フランシスはデビュー後平地で勝鞍を積み上げていった一方、障害競走に騎乗し、1999 年にはチェルトナムフェスティバル開催のコーラルカップを制している。2001 年に平地のブランドフォードステークス(愛 G3)優勝。

2002 年からジョン・オックス厩舎でマイケル・キネーンに次ぐ主戦騎手になると、2015 年まで 12、13 年を除いて毎年リーディング 5 位圏内を維持。キネーンの引退に伴って 2010 年に厩舎の主戦となり、同年パフォークで愛ナショナルステークスを制して G1 初優勝。2016 年からは拠点をイギリスに移し、ラルフ・ベケット厩舎の主戦として活躍。2016 年 42 勝、17 年 66 勝、今年 11 月 14 日現在、69 勝。シャーガーカップでは 2010 年と 17 年に個人成績のトップに与えられるシルバーサドル賞を受賞している。

日本ではこれまでも短期免許を取得して騎乗した実績があり、2013 年にアメリカジョッキークラブカ

ップ(ダノンバラード)、京成杯(フェイムゲーム)、2014年に中山金杯(オーシャンブルー)、根岸ステークス(ゴールスキー)、2015年に中山金杯(ラブリーデイ)と重賞を5勝している。